

〈資料紹介〉

粉河寺御池坊蔵

『粉河寺御池海岸院本尊縁起絵巻』翻刻と解題

大橋 直 義

はじめに

小稿は、粉河寺御池坊蔵『粉河寺御池海岸院本尊縁起絵巻』二巻二軸を翻刻し、解題を付すものである。なお、本絵巻については、和歌山県立博物館企画展「きのくに縁起絵巻の世界——開かれる秘密の物語——」（二〇一八年三月一日～四月一五日）に出陳され、同展の図録に全文の画・詞書のカラー図版が掲載されている。あわせて参照されたい。

解題

〔略書誌〕

粉河寺御池坊蔵。〔十八世紀〕写、紙本着色（淡彩色）、二巻二軸。

後補〔明治〕唐綾工字繫伽羅色布表紙。外題〔貼題簽〕「御池本尊縁起乾〔坤〕」。天地、二七・三糧〔上卷〕、二七・四糧〔下卷〕。

内題「粉河寺御池海岸院本尊縁起卷上」「粉河寺御池海岸院童男行者縁起卷下」。寸法、上卷…二七・三×二〇・一四・八糧、下卷…二七・四×二五四九・七糧。料紙は薄手の楮紙〔画・詞書共紙〕。一紙長はおよそ四〇糧なるも、その長さは一定せず、極端に短い料紙も継がれる。前記『図録』の指摘に拠れば「画中の人物に貼り紙を施して修正する部分も見られ〔上巻第二二紙、下巻第一九紙〕、本画ではなく下絵である可能性が高い」。本文、漢字平仮名交じり〔一筆〕。奥書、無。

〔概要〕

観音が補陀落浄土として開いた紀伊国那賀郡風市里には補陀落山粉河寺と称する天下無双の霊場がある。宝亀元

年十一月八日、御池の中から忽然と現れた十四五歳の童男行者は本願大伴孔子古のもとに行き、観音として現ずる。しかし、観音が秘仏となったことで常は補陀落浄土へ戻っているという噂がたち、参詣者が途絶えたところ、観音は自身の垂迹した姿である童男行者の姿をみずから製作し、御池の中島の厨子に安置し、毎年十一月十八日に開帳されることとなった。拝観することが叶わない遠来の参詣者のために、童男行者像の模像、千手観音像が鑄られて御池の中島に安置された。河内国長者娘〔国宝絵巻等〕・在原業平北方〔仮名本『粉河寺縁起』三〕・禅意阿闍梨〔同廿四〕・仁範上人〔同九〕・錦織僧正〔同十二〕・石崇上人〔同廿五〕といった様々な靈験・逸話が示しているように、童男行者と観音は不二の同体であるのだから、まず御池に詣でてから本堂本尊に向かうのが本来である〔以上、上巻〕。

仁平三年頃、他院家の衆徒との紛争に嫌気のさした御池坊の住持は、観音製作の童男行者像の模像をひそかに製作し、本物を由良湊長郷里の岡の堂に安置して、自身もその周辺に隠棲する。その後、由良長郷里に住する衛門が、

西国順礼者である孫九郎に、岡の堂の本尊は粉河寺御池坊の本尊であり、粉河に帰りがつていて夢を見た
と話す、孫九郎は岡の堂の尊像を拜する。孫九郎は粉河寺奥の河原里に住む定清にそのことを話す、定清によ
つて言下に否定される。三年後の文明十八年正月二十三日、御池坊童男堂より出火、御池坊住持の頼舜を中心
に坊・
本尊を再興しようとしたところ、頼舜と十穀坊覚音とが、本尊の再建は思いとどまるべきだという同じ霊夢を蒙る。
順礼孫九郎に再会し、岡の堂の本尊のことを詳しく聞いた定清はすぐに粉河に向かい、長老頼舜と十穀坊聖覚音に
そのことを告げる。霊夢を蒙り、粉河寺衆徒の評定をも得た頼舜・覚音・定清の三人は由良に向かう。本尊を持ち
帰りたいという突然の申し出に困惑した衛門と共に岡の堂に向かうと、衛門は「由良の寺」に是非を尋ねるために
堂を後にする。籤によって観音の真意を推し量った三人は、衛門の家に本尊を移す。そこに由良の寺の学侶たちが
やってきて、三人を責めるが、定清の弁舌を聞き、籤の結果をも知らされた学侶たちは反論をやめ、粉河寺に移送
することが決まる。同年二月一日、途上で定清が霊夢を蒙るなどしつつ、粉河に到着し、安置される。長享元年に
御池坊は再建された(以上、下巻)。

〔解題〕

粉河寺頭坊・御池坊の本尊である童男行者像の縁起について、初めて言及したのは河原由雄^①であった。日本絵巻
大成『粉河寺縁起』の解題において、河原は、国宝絵巻に関連する粉河寺蔵典籍・絵像類に言及した後に「以上の
他に正暦二年(九九一)の太政官符写や寺史にかかわる寺領文書、誓度院関係文書、また天英入寺以後の御池坊関
係文書や『御池坊海岸寺縁起』など多数ある」とするものの、この「縁起」については詳細に言及されてはいない。
しかしながら、その書名から、本絵巻そのもの、ないしはこれに類する書物であったと推定される。

原田行造^②が翻刻紹介した『粉河寺縁起靈験記』に、「御池海岸院童男行者畧縁起」として、本絵巻二軸に類した

縁起が記されている点は注目に値する。本書は、原田論考が紹介した金沢市立図書館金陽文庫蔵・元禄十三年刊『粉河寺縁起靈驗記』の他、日本古典籍総合目録データベースに拠れば、「雲泉文庫」蔵元禄六年版、東京大学附属図書館南葵文庫旧蔵元禄十三年版、岩瀬文庫蔵無刊記製版『粉河寺畧縁起并靈驗記』（扉題「粉河寺縁起靈驗記」）があり、その他、天理図書館にも所蔵があるとされる。³ なお、元禄六年版は所在不詳、同十三年版には原題簽が欠けているものの、岩瀬文庫蔵本は原装と見られることから、本書は『粉河寺略縁起并靈驗記』とするべきかもしれない。いま注意を払っておきたいのは本書の扉に示される版元「当山書林／大坂屋長三郎」である。大坂屋は紀州粉川南町を本拠とする版元で、同じく粉河寺門前を本拠とする「かなごや善兵衛」と共に西国順礼関連の書籍・絵図を相次いで刊行した本屋として知られる。⁴ 本書の一丁裏から三丁表にかけて、見開き二面を以て描かれる挿画「紀州粉河寺四至伽藍之図」は、粉河寺に現蔵される「南紀補陀洛山粉河寺四至伽藍之図」（室町時代、紙本著色、一幅。一三四・三×五九・一糶。『粉河町史』三巻に図版有）と同一の構図であることが明らかであり、したがって同書所載「御池海岸院童男行者畧縁起」の本文も、中世から近世前期にかけて粉河寺内で行なわれた縁起再編の動きと重なるものであると考えられる。殊に、「元禄本」として知られる元禄十六年写『粉河寺縁起』二帖が国宝絵巻の欠を補う形でこの時期に製作されたことを考えあわせるなら、十七世紀後期から十八世紀初頭の粉河寺をめぐる事情——紀伊藩の宗教政策および西国順礼の隆盛——なども視野に収めつつ、再考する必要がある。

『粉河寺縁起靈驗記』全二四丁の内、十丁表から十三丁裏にかけて、「御池海岸院童男行者畧縁起」が漢字平仮名交じりで記される。後掲の絵巻二軸に示される縁起本文からすれば、その分量という点で大きく異なることは一見して明らかであるものの、その文言には明らかな共通点を複数確認することができ、両者の関係は疑いようがない。小稿がまず取り組むのは、その書誌学的様態から十八世紀に制作されたと思しい絵巻二軸と、元禄年間に成立していたことが明らかな「畧縁起」のいずれが本来の形であるのか、という点についての考察である。なお『靈驗記』

十二丁裏・十三丁表の一面は粉河寺御池坊と周辺の伽藍、そして中島の「大卒都婆」の左方に錫杖を携えた童男行者が影向し、池の水面には千手観音の姿が描かれている。この挿絵と絵巻二軸における画像にもやはり多くの共通点が見えることは指摘しておく必要がある。

この「御池海岸院童男行者畧縁起」以後、簡略なかたちで縁起本文を示す書物としては、明治四十五年一月刊、逸木盛照編『第三番粉河靈利の栞』である。多色刷の表紙を有する銅活字版の本書序文には「片々なる小冊子なれども、以て粉河寺の大略を窺ふに足らん歟。若し夫れ詳細に至りては縁起并靈驗記に就て見られんことを望む」とあり、これが「縁起并靈驗記」によって補完されうる（おそらくは無償頒布の）小冊子であったことがうかがわれる。なお、この「縁起并靈驗記」は、「本云、応永十九年十一月十三日、依法水院僧都長筭所望、於三条坊門室町扇屋書写之、本者勘解由小路三位行俊手跡也、明徳四年依願主勘解由小路入道義将御詔云々、長祿二年戊寅八月三日書之、文明二年庚寅七月廿二日書之」と奥書に示す粉河寺蔵文明二年写『粉河寺縁起并靈驗記』を指すかとも思われる。以下、この小冊子に示される略縁起を引用する。旧字体等は通行字体に改め、振仮名は略した。

御池海岸院縁起

宝亀元年十一月十八日大士童男行者の姿となりて、池の中より出現ましませ給へるに依て生身観音最初出現池と名付くる也。忝なくも大聖みづから宣ひけるに、此所に遊びて広く悪業の衆生を救ふ、則ち海岸孤絶の宝窟なりと。依て海岸の名を得たり。洵に穢土の中に浄土を移して例なき霊場と云ふべし。されば権聖碑文を記し御池中島に建て、勝跡を讃め給へり。本尊は童男形の観音にて大士親ら御製作あらせ給へるものなり。之れ実に當山根本の靈跡なれば、賽者先づ御池童男堂に詣で、次に金堂を押し奉る事、寔に所以なきに非ず。元より月の水に映れるも決して二つなきが如く、観音即ち童男と化し童男また観音に復り、観音また童男を作りて本迹不思議一如の妙を示し給へる也。観世音は十方に身を現じ一乗を広め給ふ其姿様々なる中に、末の世に応

じ我國の機に適ふ童男の姿なれば、此身を以て多くの利生を現はし給へり。応以童男身得度者即現童男身而為説法といへる妙経の金文実に空しからずと謂ふべきなり。かの本願伴氏が闇路を出で、大悲の月を眺め、長者の娘は五障の雲晴れて九品の台に上り、又在中将の北の方へは珍らかなる果物を授けて紅袴のしるしを天に耀やかし給ひ、或は禅意阿闍梨が邪見を翻へして正道に誘へるが如き、其他童男の御利生数ふるに違あらず。其後海岸院の住持所以有て件の童男の尊像を日高郡由良里岡の堂に置え奉り、粉河には寸分も違はず尊像を写し似せ、竊かに入置きたりしに更に知る者なし。文明十八年二月二十三日の夜、凶らざるに童男大士の龕の内より火起りて似せたりし像は焼失せたり。住持を初め一山の大衆悲しみ兎角と沙汰せし程に、様々の不思議靈夢などあり、頓て由良の里より尊像を迎へ来りて再びみ堂に安置し奉りぬ。乃ち今の本尊是なり。三百三十三年の数を經て重ねて本土に還り給ふこと又不思議ならずや。盛衰は世の常なりと雖も尊像勝跡永へにあらたまらず。僧俗男女一度此靈地をふみ縁を結ぶものは現當二世の利益空しからず。本尊出現の日なればとて今に年ごとの十一月十八日(今改めて十二月十八日)御帳を裏けて利物絶ゆることなし。因に云ふ、嘗て花山法皇西国三十三所順礼御開關の時御池坊に暫らく車駕を留めさせられ給ひ、其後白河院、鳥羽院、後白河院の三上皇御順礼の節も御池坊に御駐輦遊ばされたり。故に當院より本堂へ御幸の道筋今に至り御幸道と称へらる。就中鳥羽法皇本尊池中より出現の因縁を深く叡感あらせられ御池坊の勅号を賜はりたる也。

傍線を付した御池坊回祿の日付を「文明十八年二月二十三日」とするが、西国第三番繪卷二軸では同年の正月二十三日のこととする。一方で、先に言及した『粉河寺縁起靈驗記』では、繪卷二軸・『西国第三番粉河靈利の栞』と多くの表現は重なりながらも、元禄十二年版・無刊記版のいづれにおいても、御池坊回祿の日付を「文明廿三年正月廿三日」とするのである(文明は十九年七月二十日で長享に改元)。御池坊回祿を經て、御池海岸院のかつての住持が日高郡由良里の岡の堂に童男行者の真像を安置してから「三百三十三年」の後に再建なった御池坊に再び安置されたとするが、『縁起

『靈驗記』『靈刹の葉』ではいずれも御池坊再建の日付を記さず(絵巻「長享元年十一月初の八日」)、したがって絵巻のよ
うに「岡の堂」に安置した日付を「三百三十三年」前の「仁平三癸酉の年九月十五日」と具体化することもない。

具体性という点に関しては、絵巻下巻では、西国順礼の「筑前国安の郡」の「孫九郎」、「ゆらのみなと長郷の
衛門」、「河原といへる山里に北田三郎太夫定清」、「御池の長老」である「頼舜」、「大門の十穀坊」に住する聖「覚
音」らが色鮮やかに描かれる。一方、『縁起靈驗記』『靈刹の葉』ではこれらの人物に言及されることはない。

「河原」の「北田三郎大夫」として、真先に想起されるのは、由良法燈国師覚心と関わり深い誓度院を永享二年
に粉河寺から猪垣村に移した至一上人(志)。覚心實の母の父であろう。『紀伊統風土記』那賀郡猪垣村「廢誓度寺」
項に、「至一は、昔鎌垣、莊西河原村に北田三郎大夫といふ者の女あり。常に粉河寺の観音を信じけるが、或時、男
子を産む。三郎大夫曰、嫁せずして子を産むこと不義なりとて、其子を粉河寺大鳥居の辺に棄て、誓度院の主、其
子を拾ひ取て養育を、法燈国師粉河寺大門供養の時、此児を所望して弟子となす。薙髪の後、至一といふ」とある。
加えて、『統風土記』那賀郡粉河莊下・西河原村「釈尊寺」項には、至一上人の真影および上人の筆によるとされる
釈迦弁財天像二幅が蔵されるとした上で、「粉河御池坊童男佛の縁起あり。巻尾に「文明十九年、河原北田定清」と
書す。書法善し。定清は至一上人の母家北田三郎大夫の後といふ」と記される。この「縁起」については未審であ
るが、法燈派・誓度派・至一(志)の連環の内部にこの縁起が捉えられていることは、本縁起が興国寺との関わり
について言及する点との関わりからも興味深い。

「頼舜」については、御池坊文書『粉河寺御池坊旧記』文明十四年六月十四日条に、中門に多聞天・持国天像を
安置した際、供養法会の導師となったのが「海岸院長老頼舜」であったとする。⁸⁾御池坊文書・天英本『粉河寺旧記』
同日条にも「御池頼舜」が導師を勤めたとする記事が見えている。⁹⁾また、「大門の十穀坊」については、天正十三年
の紀州征伐の前で退転・焼失・復興した堂舎を列記した粉河寺文書・文化七年写『粉河寺旧記』控¹⁰⁾には示され

ないものの、室町期の粉河寺伽藍の状況を伝えるとされる「南紀補陀洛山粉河寺四至伽藍之図」および「近世」制作の「粉河寺参詣曼荼羅」には、大門の外（門に向かって右方）に描かれる建造物に「十穀坊」と墨書されているのが確認される。とりわけ、注目に値するのが天英本『粉河寺旧記』に見える次の記事である。

一、文明十八^{丙午}年正月廿三日亥剋、御池海岸院炎燒。同二月^仁庫司柱立。

一、同二月廿七日^仁、御池本尊觀音^{御製}御製作之童男三百卅三年以前^仁■^御年平三^{癸酉}年九月十五日^仁失セラル。■^{靈夢}

乃^テ御池住持覺音、川原ノ定清二人、由良湊長郷之里^{ヨリ}迎來^ル也。委細有縁起。

天英本『粉河寺旧記』は、寛永年間（一六二四～四四）に御池坊住持を務め、天正十三年の兵火からの復興に尽力した天英（天海寛）が撰述した寺史の草稿本とされ、粉河寺に伝存する同種の書物としては最古のものである。さて、本書では、文明十八年正月二十三日の御池坊回祿に言及した後に、観音が制作した御池坊本尊である童男行者像は三百三十三年前の仁平三年九月十五日に失われたのだが、靈夢によって「御池住持覺音」「川原ノ定清」の二人が「由良湊長郷之里」より「二月廿七日」に迎え入れたとする。仁平三年の日付、「覺音」「定清」といった人名、「長郷之里」といった地名は先に見た『縁起靈驗記』『靈刹の葉』には見えず、絵巻下巻だけに見られるものである。しかし、「覺音」を十穀坊聖ではなく「御池住持」とする点、真像が粉河寺に移管された日付を「二月廿七日」とする点については絵巻下巻の内容と齟齬を来している。

文明十四年の段階で頼舜が御池坊（海岸院）の長老を務めていたことは先述の通りであるが、火災が起こったときされる文明十八年の段階でも同様であったかどうかは不明確である。一方、「覺音」の名は他に管見に入らないが、『粉河寺御池坊旧記』『粉河寺旧記 控』に拠れば、天正年間に根来寺との間で起こった一連の争乱の際にそれぞれ御池坊の住持であった覚翁・覚順が武勲をあげたとしている。この二人と「覺音」が関わるかは分からないが、「覺」字が通ずる僧名が御池坊住持を務めていたことには注意しておきたい。ただ、むしろ、絵巻が「覺音」を

「聖」としている点に留意するなら、天英本『粉河寺旧記』文明十一年三月十一日条、同年五月条に名に見える行人方の覚信上人が想起されるべきであろうか。中世粉河寺の寺院組織について論じた高木徳郎¹⁰⁾は、南北朝から応永期頃まで、粉河寺の衆徒(学侶)と方衆(軍事・堂舎造営・勧進活動)の寺内勢力に行人(寺外活動・軍事)を加えた三勢力で紛争状態にあったこと、応仁元年の粉河寺回祿を経て、その復興期の文明年間以後には、勧進聖・覚信派を中心とする行人を取り込んだことで惣寺体制が構築されたことを明らかにした。この「覚音」が実在の人物であったのかどうかは分からないが、その僧名からは、勧進聖覚信とその一流の存在が連想されるとは言えようか。

絵巻下巻に示される一連の出来事の日付は次の通りである。

仁平三年九月十五日 (一五三) 本尊、岡の堂に安置される

文明十八年正月二十三日 (一四八六) 御池坊出火

同 年正月二十四日 頼舜・覚音、同じ霊夢を見る

同 年正月二十五日 定清、孫九郎と再会

同 年正月二十八日 定清、覚音に報告、次いで頼舜に報告

同 年正月二十九日 三人、粉河を出立して由良の衛門邸に到着

同 年二月一日 本尊を粉河寺に移管

長享元年十一月八日 (一四八七) 御池坊再建

まず、長享元年十一月八日の御池坊再建について、天英本『粉河寺旧記』に「同年(長享元年)十一月八日午剋¹¹⁾、御池海岸院堂柱立¹²⁾、『粉河寺御池坊旧記』「長享元年丁未十一月八日、建¹³⁾円通殿¹⁴⁾。御池童男堂也¹⁵⁾」とあり、この時に再建されたのは確かである。また、御池坊の出火の日付についても、絵巻と先に引用した天英本の他、『粉河寺御池坊旧記』で確認できる。ところが、童男行者像を由良から粉河寺に移管した日付については、絵巻が二月一

日とするとところを天英本では「二月廿七日」とするのである。これが誤記であるかどうかについては、もちろん分らない。今、確かなことは、天英本が撰述された寛永年間の段階で「委細有縁起」と記しうる詳細な御池坊本尊縁起が存在したこと、それが現存絵巻二軸と類似しつつも一部異なる本文内容を持つものであった可能性があるとある。

その「縁起」について、御池坊回祿を伝える『粉河寺御池坊旧記』文明十八年正月二十二日条にも「大_三有_二靈驗_一。委_二見_三縁起_ノ記_二」と見える。この「縁起ノ記」という表現から、少なくとも江戸前期の段階においては、絵を伴わない書物として伝存していたと見うけられる。

その後、十八世紀頃に現存の絵巻が制作されたと推定されるが、その時期の状況について貴重な情報を提供する資料がある。東京大学史料編纂所蔵謄写本『粉河寺旧記』五冊(二〇一五―四九七)がそれである。これは天英本や文化七年写『粉河寺旧記 控』とは異なるもので、その第五冊奥書には次のように記されている。

右粉河寺旧記

紀伊国那賀郡粉河村粉河寺藏本明治廿一年七月編修長

重野安繹採訪明年四月謄写す

修史局が帝国大学に移管され、臨時編年史編纂掛が設置された明治二十一年^(一八八八)、修史事業の中心的役割を担った重野安繹(二八二七―一九一〇)は粉河寺を訪れ――幾度か紀州を訪れたのか、それとも借用したのかは分からないが――翌年四月に謄写を終えている。その第一冊の冒頭に「旧記条目」として次のように掲げられている。

一 綸旨院宣等

一 大政官符宣

一 古代寺領宣旨(以上、第一冊。括弧内引用者注)

一 粉河寺縁起(第二冊)

一 絵縁起

一 御池坊旧記抜書写

一 御池海岸院本尊縁起(以上、第三冊)

第一冊には『粉河町史』第三巻に「粉河寺文書」「御池坊文書」として収録されている正暦二年(九九一)「太政官符写」以後の文書類が謄写される。第二冊には先に言及した粉河寺蔵文明二年写『粉河寺縁起并靈験記』を謄写したものと思われるが、本奥書・書写奥書は謄写されておらず、その経緯は詳らかではない。字配りや用字などの分析が必要であろう。第三冊においては、まず国宝本絵巻の詞書を謄写した後、「御池坊旧記抜書写」として『粉河寺御池坊旧記』に類した資料を謄写する。ただし、『粉河寺御池坊旧記』に見えない条目も記されており、両者の関係は明らかではなく、「御池坊旧記抜書写」とする資料が寺内に伝存するかも不詳である。第三冊の末尾に四八丁を要して謄写されるのが「御池海岸院本尊縁起」で、これが絵巻二軸と極めて深い関わりを有するのである。

第四冊・第五冊の内容は右の「旧記条目」には言及されない。第四冊には「粉河寺発基以来記」全一一八丁が謄写される。六十一條からなる粉河寺の寺史説話集で、その本文は、大伴孔子古による発願から仮名縁起に記される様々な靈験、その後の栗栖莊をめぐる相論・騒動や、畠山および室町將軍の関与など、伝存文書でも確認しうる出来事が物語られる。そして御池坊の回祿と本尊移管に関する縁起も記され、天正の兵火とその復興、天英の入寂、粉河祭礼の始まり、近來の状況まで記されるに至る。豊かな内容を有するものであったことが窺われるが、寺内に伝存するか否かについては調査中である。原本を閲覧しえた後に翻刻紹介を行ないたい。第五冊には文化七年写『粉河寺旧記 控』が謄写されるのだが、寺内に蔵される別本『粉河寺旧記 控』の奥書に次のように見える点、注意しておきたい。

覚

一、去文化四卯年、当山発起已来古記差出候様被 仰付、則大帳二通指出候処、又今度旧記之□不残出し可申
旨、社寺奉行今申来二付、右之通相しらへ書写差上候、
(類)

文化七年午六月 日

文化四年に「発起已来古記」大帳二冊を社奉行に提出したところ、同七年に「旧記」を新たに制作・提出するよ
うに求められたというのである。事実、謄写本『旧記』第四冊の「粉河寺発基以来記」には序に「于時文化四卯年
仲夏吉日／奉納 南紀城北曝溪住／田中峯雲源貞成」とあり、奥書に「文化丁卯年夏吉日／主計之佐貞成書」と見
える。和歌山城下、紀ノ川筋に住する田中貞成については未審。

さて、第三冊に謄写される「御池海岸院本尊縁起」について。本書についてまず注目されるのが「天明七(七七八)丁(七八七)未(七八七)歳秋
八月彼岸日」との奥書を有する点である。その本文については、まず絵巻と『粉河寺旧記』所引本では字配りや字
母が異なり、特に絵巻においては絵によって本文が別の段に分かたれる箇所であっても、『旧記』所引本では絵が挿
入される指示もなく、行すら改められることもない。従って、当時、絵巻とは別に天明七年奥書本が存在したこと
が明らかであるが、難読文字についてはほぼ同形の文字を記すこと(下巻第七段一八行目「に」等)、それでいて本文異
同の観点から両者は親子関係にないことから、両本に共通する親本が存在したと推定される。なお、後掲の翻刻に
は天明七年奥書本との校異を付した。

絵巻二軸が寺内に存在することについて初めて言及したのが、先に紹介した明治四十五年一月刊、逸木盛照編
『(西国)第三番 粉河靈刹の葉』である。「御池坊宝物」として、その筆頭に「一、御池海岸院絵縁起 書画共筆者不詳」と
示している。同様の什宝目録としては文化七年写『粉河寺旧記 控』が管見の限り最も古いものだが、その「御池
坊什物類」目録はこの縁起絵巻に言及していない。文化七年以後にこの絵巻二軸が制作された可能性もあろうが、

現存絵巻が「本画ではなく下絵」であると見られることから、天明七年以後、同年奥書本の親本と目される一本をもとに試作品として絵巻二軸が制作されたものの、浄書されるには至らず、従って文化七年の寺社奉行への報告には言及されなかったと今は考えておきたい。

小稿の最後にこの縁起の成立期について言及しておきたい。縁起の全体像が成立しうるのは、もちろん文明十八年(二四八六)から翌年長享元年以後のことであるが、由良の「寺」に言及されている点が重要であろう。衛門の館までやってきた僧たちの「寺」とは心地覚心の開いた興国寺と理解するべきである。覚心は正応五年(二二九二)に「誓度院条々規式」を定め、その後、粉河寺寺内の別院であった誓度院は覚心門流の禅院となつてゆく。大石雅章に拠れば、永享二年(二四三〇)頃に粉河寺寺外に移った誓度院であったが、粉河寺との関係は続き、応仁元年(二四六七)の粉河寺回祿の復興段階において、粉河寺から誓度院に協力が要請されている。¹³その後、復興期の文明年間において、誓度院と粉河寺との関係がいかなるものであったのか詳らかではないが、関わりが継続していたとすれば、誓度院の本寺である由良興国寺と粉河寺との関係も十分に想定されるものであろう。したがって、この縁起が成立しえたのは、長享元年(二四八七)からさほど隔たらず頃であったと推定する。

ただし、絵巻上巻、詞書第四段に示される次の文言は重要である(句読点・濁点を補った)。

げに御池は粉河のこの起りの源なりとかや。世の人のいひつたへ、近きわたりのものは、かならずしもまづこ、にまうで、次に金堂にあゆみならはし侍りけり。其いはれあり。

かつて簡略に言及したことがあるが、延慶本『平家物語』第五末(卷十)十五「惟盛粉河、詣給事」に見られる平維盛の架空の寺内巡礼次第が御池坊を拝した後に本堂へ向かうという順序となつてすることに注意しておきたい。たしかに粉河寺参詣時の動線はこの通りであるが、延慶本が参照したことが間違いない仁範『大率都婆建立縁起』における仁範の寺内巡礼はこれと異なつた順序で記されているのである。この延慶本における独自説話が延慶書写の段

階から存在していたのか、あるいは応永^(一四一九～一五〇一)二十六年の現存本書写時に補われたものであるか、にわかに結論は出せない。ただ、「室町」制作「南紀補陀洛山粉河寺四至伽藍之図」には御池坊の隣に描かれる「無量寿院」に「学頭」と墨書されていることは見逃せない。「四至伽藍之図」の御池坊には応永三十年に建立された多宝塔が描かれているから、この時より後に描かれたものであることは間違いない。しかし、御池坊が「学頭」であるとされる初例は永和三^(一三七七)年「粉河寺行人方着座記録」(御池坊文書)であり、したがって、安定的に寺家執行・学頭を独占し始める時期よりも遡る、御池坊による一山支配が不確定であった頃の状況を描いていることになる。現存延慶本『平家物語』が書写された応永年間には、粉河寺内では方衆・行人間で相論が続き、御池坊が頭坊として固定される直前期であったと言える。この時代、御池坊の優位性を証明するための言説——「げに御池は粉河のこの起りの源なり」が生じ始めたのではないか。

すなわち、絵巻下巻に見られる物語は長享元年をさほど隔たらぬ十五世紀末頃に生まれたと考えられる一方、上巻の縁起言説は応永年間以前の御池坊の優位性を確立してゆこうとする時期を淵源とするものと考えられる。このことは、上下巻の巻頭に示される内題がそれぞれ「粉河寺御池海岸院本尊縁起卷上」「粉河寺御池海岸院童男行者縁起卷下」と異なる点に関わるのかもしれない。

〔注〕

(1) 河原由雄「粉河寺縁起」の成立とその解釈をめぐる諸問題」(日本絵巻大成『粉河寺縁起』中央公論社、一九七七・六)。

(2) 原田行造「金沢市立図書館蔵本『粉河寺縁起墨験記』——翻刻と解説及び「仮名縁起」との関連について」(『金沢大学教育学部紀要』人文科学社会科学編)三二号、一九八三・二)。

(3) 同データベースに記載のある内閣文庫蔵(近世)刊『西国第三番粉河略縁起』(一九二一〇二二七)は別本。なお、岩瀬文庫蔵本(一

- 一〇—一二三二)は新日本古典籍総合データベースでマイクロ画像が公開されている。
- (4) 山崎淳「西国三十三所順礼道中図」の多様性——大坂屋長三郎版を中心に(和歌山大学紀州経済史文化史研究所編二〇一七年度特別展図録『紀州地域と西国順礼』二〇一七・一一)。
- (5) 山本陽子「粉河寺童男行者信仰小考——フリア美術館蔵伝聖徳太子修業像を中心に」(早稲田大学『美術史研究』二八号、一九八九・一二)は「粉河寺参詣曼荼羅」左方中段に描かれる「童男行者」の形姿に着目する。
- (6) 架蔵本。
- (7) 前掲注(1)河原論文に拠る。本書が応仁元年(一四六七)の粉河寺回祿の直後に書写されたことも重要だが、小稿が扱う絵巻下巻に示される具体的な年記ともかなり近い時期にあることは重要であろう。
- (8) 近世初期写。『粉河町史』三巻所収。
- (9) 『粉河町史』三巻所収。
- (10) 『粉河町史』三巻所収。
- (11) 高木徳郎「中世粉河寺の寺内組織とその再編——天英本『粉河寺旧記』の検討を通じて」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』四三号第四分冊)、一九九八・二二、同「中世粉河寺の成立と展開」(『日本中世地域環境史の研究』校倉書房、二〇〇八・一〇)。
- (12) 天明七年奥書本が明治二十一—二二年に寺内に伝存していたことは間違いないが、現在では所在が不明瞭であるため、原本の閲覧調査には至っていない。
- (13) 大石雅章「天台聖護院末粉河寺と聖の別院誓度院」(河音能平・福田榮次郎編『延暦寺と中世社会』法蔵館、二〇〇四・二)。その他、熱田公「誓度院について」(安藤精一先生退官記念会編『和歌山地方史の研究』宇治書店、一九八七・六)がある。
- (14) 大橋直義「紀州地域学というパス・スペクティヴ——根来寺と延慶本、平維盛粉河寺巡礼記事について」(大橋直義編『根来寺と延慶本』『平家物語』——紀州地域の寺院空間と書物・言説』勉誠出版、二〇一七・七)。

〔付記〕

閲覧・調査に際し、粉河寺管長 逸木盛俊師、和歌山県立博物館に多大なる便宜をはかっていた。記して深謝申し上げたい。なお、本稿は二〇一八年度科学研究費補助金(基盤C、一八K〇〇三一八。研究代表者・大橋直義)による研究成果の一部である。また、翻刻および校異の作成に際し、稲本早紀・太田裕美子(和歌山大学教育学部四年生)の協力を得た。

〔翻刻凡例〕

- ・粉河寺御池坊藏『粉河寺御池海岸院本尊縁起絵巻』二卷二軸の詞書を翻刻する。画については和歌山県立博物館編『きのくに縁起絵巻の世界―開かれる秘密の物語―』(企画展図録、二〇一八・三)所収の全編画像を参照されたい。
- ・字配りは原本のままとした。
- ・異体字の類は通行字体に改めた。
- ・□は判読困難の文字。丸括弧に推定される文字を示した。
- ・東京大学史料編纂所蔵謄写本『粉河寺旧記』(二〇一五―四九七)第三冊を元二七六七に天明七年奥書本を復元し、絵巻二軸と対校した。
- ・校異欄には天明七年奥書本との異同を示した(但し、漢字を仮名に開くか否か、送り仮名・仮名遣いの相違には言及していない)。
- ・翻刻注も併せて記載した。なお、各項冒頭の数字は「段番号―行」を意味する。

〔翻刻〕

【上巻…第一段】

粉河寺御池海岸院本尊縁起巻上

弘誓の海のふかきにはいつれの衆生か赴

さらん妙法を弘め苦をぬき楽をあたへ

たまへる薩埵多き中に殊に因縁深く

仏の御教へいやねんころなるはた、観自

在ほさつか名をき、身をみるもなにか空しき

樹王のかけにあそふに譬ふされは玉

敷の宮古のうち嶮しきひなの山の奥

までもいらかをならへ尊像をあかむ応物

現形の月はいたらぬ里もなく霊跡と

きこゆるところ浜の真砂のかすく

はよみもつくさし

【上巻…第二段】

中にも山の名四方に高く殊にすくれて

きこゆるは紀南なかのこほり風市の里

補陀落山粉河寺になん侍るをのつ

からなる所のけはひも世に超てそ

覚ゆうしろは足曳の山ふかくそひへて

葛城や高まにつ、く峯の白雲は

たえすさかへ花かとうたかはれまへは

よしの、川瑠璃の水漲り落花の波

まを漕船のほのくくとみえなを名にし

おふ粉河のなかれなのめに長うして

かのふたさんの二十めくりの瀧の白糸

にもたくひなまし左の方は丘しけく

溪かさなり金峯の頂きかすかに

はれて日の光うら、かにして日照

光明の名をやかぬらん右は野地

目をきはむるにきはもなく民の

かまとに思ひの煙立のほりくるしき

海によするなみ下化のすかたいとしるし

また西方に通しておもひを送るに

たよりあり長き尾上の^草。村に尾花くつ

華のさきみたれそよふくかせに匂ひ

えならす谷の小玉木みとりふかきに

蝉なき鳥の囀るや笙歌の声にはの

かよひ蔓艸白華の粧ひ余所なら

す山なかく峨々とめくりし其

うちの空曠にいと清らなるこゝをし

もふたらく浄土なりとて大士

みつからひらきあとをたれたまへりと

なんいひ伝へたり堂塔いらかをな

らへ三解脱の門より入て大般涅槃

の金堂にいたる六角の帳台は

六趣の孤子を覆ひ白毫光を伝

へし三五の燈は五々の暗を照し

九の井は大士自らつくらせ給ふとそ

いへる九水の水をむすひて楢つみ

闍伽の水をたてまつりては諸仏無垢の

身を浴し九界自性清浄の心をや

洗ふらん一つ御神の三所におはします

宮居さひたる森の古枝に蔦かつら

のはひまつはれしもさなから護法

のひさしきを示かとそしらる五百

あまり六十はかり檐をならへし寂

莫の窓のうちには数百の浄侶玉の

泉に口すゝき三千の妙境を觀して

止觀の水をすまし龍門より吐

出す玉兔の光を招ては是名持戒

の圓文を誦て正覺の花さやかならん

事をねかひ或は遮那三密の鈴の

声は法界宮に響て三十七尊をや

驚すらんげに三宝久住し効驗

のいちしるくおはしますにそ六

十余州よりまうてき一心に御名を

称る声々は風猛山の嵐に和し

皆得解脱のみそらには三毒七難の

塵もなし一天に二なき靈場とも

いひつへし

【上卷・第三段】

わきて此山の靈跡ときこゆるは

生身觀音最初出現の砌御池海

岸院といへる別院にてそ侍る

本尊は即ち真身観音の御製

作にて童男応化の尊像也

濫觴をくはしく尋るに正法明

の本高く常寂光の空にあそひ

たまふといへと迹下の月は影を

三土の水にうつして名を三十あ

まりみつにわかつてりたのもしな苦き

海に引網も深き江に沈をこそ猶

哀とやみそなはし西方より南の

海に土をしめ猶また此寺には迹を

垂給るならし此三の浄土本より

衆生のために莊嚴し給ふめれと

末世濁悪の衆生のために近く頼

あるは粉河の浄土ならんかし抑

千手観音浄土ふたらくせかいのあり

さまを尋に衆宝莊嚴の道場光

をましへ玉の林蓮の池それ恢廓

にして美を極めしあたり極楽世界

のことくとかや直に此西南にあたり

海の中に有となんいへり其山のすか

た上は広く下は狭く峻孤として

ひとりそはたてりよりて海岸孤絶山とは

いふなめり神通を得るにあらざれば

ゆきかふ事かたしとそこゝに大悲

やむ事を得ずして善功方便をめ

くらし穢土の中に浄土をうつし普く

罪深き男女をみちひき給はんとて

青蓮のまなしりを廻し広く我

秋津洲をみそなはし此地をえらひ

しめたまへるに 先無謀の神月を

はこひ池をうかちて南海をかた

とり島をまうけてふた山を移し

霊木をのつからおひて宝樹の風

をつたふさてしもしみしき瑞光

を放て伴氏か過しよの善種を起

さしめ宝龜に改りし始の年

十一月中の八日にて侍りしとか

十あまり四つ五つはかりなるさもうる

はしき男童のすかたとなりて

御身に法衣をまとひ手には摩

尼をつらぬきたる百八の念珠を

とり六度圓滿の錫をたつさへ件の

御池の中より忽然とあらはれ出

給へりとなん是そ三十二応にいへる

所の応以童男身の形ち成へし

応以童男童女身得度者即現

童男童女身而為説法とかや宣

たまひし一実の金文(禮)いつはら

ざるをやまた大(禮)の水中より現れ

たまひし御事も例しすくなから

すとそ承るかくて童男行者は

伴氏か家にゆき願ふ所の佛を造り

えさせんと契りやかて光明の御

堂に引こもりゐて八日になれるあし

た千眼の光鮮に観自在尊と成て

立せ給へり本願孔子古か一家を始め

近辺の男女はせあつまり面り

慈容を拝み奉りぬるよしこれ

加被力によらすはいかてしからん此

真身観音即是浄土の教主また

これこのてらの本尊なり思ふへし

く本より迹を垂れは迹は必本有といふ

事を観音の本より童男の迹を

垂給へは童男はまた垂跡の姿をして

即本地の観音に復りおはしませり

実に本迹雖殊不思議一の理を

正しく示し體用不二の姿をみせ

給ふなめりかゝる不二の妙體を両

所にあかめ奉りて生身観音

とはよひ奉るなり童男といひ

観音とわかつも水と波とのわく方も

なきかことし嗚呼仰ひても

猶あまりあるをや

【上卷・第四段】

常在靈山の月は人の心の浮雲にそら

かくれて光をおさめたまふとはいへと

宇闔王のために毘首羯磨かきさみし

梅檀の像は世にと、まりなへて濁悪の衆

生をすくひたまへり此寺の真身観音

伴氏らかためにしはしおかまれおはし

ませと永く真容を瞻奉るへきならず

よつて伴船主六角の龕を作りおほひ光仁

天皇に奏し七重の錦の御帳をかけさせ

たまひしよりた、光明異香のしるし

をうるものはかりおかみ奉れりとそ往昔

よろつの人の諺にいへらく粉河寺の

本尊はふたらく浄土の教主生身観音にて

常は浄土にかへりましますはようかうなる

いとめつらかならんさうなり寺にまし

まさ、らん折しも歩みをはこひ礼

拝恭敬なとし侍りぬともさらにく

其益なかるへしなといふ言の葉いひ

ちらしてまうてくる人かれく也

こ、に大士御慈みのふかくして人を濟せ

たまふの巧に富たまへれば低頭合掌の

結縁むなしからせしとふた、ひ妙

色身をあらはし親くみつから童男行者

の尊像を彫みか、せ給ひてこれわか自在の

身真のすかたなりと忝も示し聞えさせ

給ひかのふたらくを移して初めて

現れ出させ給ひにし所なれば御池の

中島にすへをかせ給ふとなんいへり

まよへる人の情にしたかひてかく曲さに

利生の縁をほとこしたまふ御事

悉檀隨機の御めくみあらたならずや

いふかりし人々やかてうたかひの雲晴し

かはまたまうて来るものいやまさりに

まさりけりさてか、る不思議の本尊を

臭穢の凡身ちかくよりて御軀に触また

塵にけかし奉んはおそりありなと沙

汰しあひやかて御池のかたはらに精舎

を締ひ金玉をましへ龕をかさりて

彼尊像を移し奉り戸さしこめぬ

本尊出現の日なればとてた、年ことの

十一月中の八日にのみ御帳をか、け広く
よろつの人にはおかませ侍りけりさて
遠つ国よりまうてくるもの聞伝えてか、
るいみしき靈像をおかみ奉らざる事
なかき恨なりなど歎き聞えければわ
りなき事におもひ赤銅をとろかし童男
の尊像をかたのことくうつしにせ中鳥
にすへはへりまたちなみに千手千眼の尊
像をも鑄奉り池の中なる巖の上
には安し奉りてけりこれしかし本迹
不思議一の妙體を表しけるものならし
千とせのけふまでなをさかんに一天の男
女婦依しおほくの巨益をかふる事ひと
へに此靈像の因縁によれるものなりとそ
けに御池は粉河のことの起りの源なりと
かや世の人いひつたへ近きわたりのものは
かならずしもまつこゝにまうて次に
金堂にあゆみならはし侍りけり其いは
れあり世下りわれと心の水をかきにこし

けるにやさいつころよりたえて真身も
また童男の御かたちをも共に拝み奉る
ものなしいたましくかなしむへし
されと本より末代の衆生のために彫残させ
おはしける行者の尊像はなへて凡愚の
眼をへたてたまはずこれそ生身觀音
利生方便のつきせざる御すかたなれば
わきて貴み信すへきはた、此靈像か
【上卷…第五段】
応化のすかたまちくくなる中に末の世の
心に応しわか神国の機にかなふらんとそ
しらるゝはわきて童男行者のうるはしく
柔順なる御すかたよりこえたるはあらし
両宝の面影にほのかよひまた儒履釈袈
婆の風情にも似たるとそ覚ゆさうなり此身
を以てかすくゝの利生を施しおはし
ませし事いかてかいひつくさん中にも
童男の身をけんし信濃国にかよひ
日ことに本師の尊像を拝したまひつ

ゐに如来の詔をうけ一光三聖の尊容を
みつからうつし此寺に安して念佛三昧
のこみちをひらき此土の衆生と彼国の
佛と偏に因縁浅からざる事ををしへ
給へり

【上巻…第六段】

或時は童男の身を化し河内国にさすら
ひて長者かひとりのむすめのおもき病に
ふしてすてにしぬへかりしをいのりいけ
させたまひ粉河といふところにすみ侍る
なりとかきけしうせ給ひぬかくて河には
甘露の乳をなかして粉河と告し言の葉
をさとさしめ自然の燈をか、け後のし
るしにとてとりて帰りし紅の帯に
さやつきたるをははたして御手に捧
たまひかすくの神変を現しいよく
不二の妙體をあらはせり粉河寺といへ
るも童男のみつからよひそめたまひし
名にてこれよりせいひならはしける

【上巻…第七段】

或時は童男のすかたとなり在中将の
北方にまみえ世にめつらかなるくた物を
さつくよろこひの身にあまりてあたりに
みえし紅の袴をわらは部の肩にかけま
いらせしに後まうて来て業平と北方も
ともに真容をおかみ奉られしに件の
はかまを左肩にかけおはしませしかは
紅の袴のかゝるしるしるくも世にか
かやきなへて人あふき貴みにけり

【上巻…第八段】

一日はまた童男の身をもて禅意阿闍梨か
ために我國の三十一文字の言の葉をつら
ねいましめ給ひしかはやかて十善帝位の邪
望をひるかへし十号の聖果をもとめ侍り
けりこれみな三千果成して本有のすかた
をもてむかしの願をみてたまふ無為のすかた
なれば更に別の神変奇特といふへからす
よつて邪見の空に沈み因果をなみし

あるはあさくさとりぬるも性具性悪の

妙理をまなひ心をこゝにとゝめてかゝる

自在の妙用を信しよろしく十双五隻の

普門にあそひ九界を度せん事を願ふ

へし事くはしくは別の巻に載はへれ

はこゝにはいひもらしぬ

【上巻・第九段】

寛徳の比かとよ仁範上人とていみしき

聖いまそかりけり行基菩薩の再誕に

て文殊の化し給へるなりとそ申伝え侍る

上人ふかく此寺の効験を信しまし當山

にあとゝめて四所の靈地をえらひたまへり

中にも出現地をいたう貴ひ給ひ御池の中

嶋に大率兜婆を立てみづから縁起の文

をしるしたまへり其文のすゑに當院の

景色わきて四神に応し率土の外に

超たりとて後へに高きみとりは靈山の

旧き風をうつし靈沼の清る水には

補陀の新なる月を迎へたりなとつらね

て称嘆したまへりけり

【上巻・第一〇段】

中比小一條院の皇子かさりおろさせたま

ひて錦織の僧正行観とそ申奉りける

はしめて此寺の貫首とはならせ給ひて

けり古今の文を探り索め冥応のいと

あらたなる事ともを感じたまひしか

靈跡おほき中にもわきて御池中島は

生身観音最初出現の地なりとて仁範

上人の碑文にも根本精舎西南去二町許有

一勝地此大悲観音最初出現之地なりとかや

しるされたりかやうの靈場にこもりて

まのあたりしるしを見奉らはやなと

小賢しくおもひこめたまひてふた

こゝろなくいのらせおはしけるに夢にも

あらずうつゝにもあらず頻伽の妙なる

声にもなをまさりたる御こゑのして此所は

大聖游化靈地此砌は海岸孤絶宝囉なりと

いとさやかにきこえにけりとそまことに

此所をさして南海補陀の宝刹なり
常に遊戯すと観音みつから告させ
たまへはつゝ、しみて信したてまつる
へきをや

【上巻…第一段】

又山王十禪師権現も粉河寺は我朝のふた
らく浄土なりこゝにゆきて往生の素
懐をとくへしなと石崇上人には
神勅ありしとなん記しはへるかう
やうの告こゝ、かしの靈佛靈神あま
たおはせし事ともおほく異文にのせ
侍りもし浄土を移したまへりといふ
をきゝて猶予せんものは梵王と身子か
見しところの異なるに同しからんかし
たつねてしりぬへし

【下巻…第一段】

粉河寺御池海岸院童男行者縁起巻下

そのかみ御池の住持と大衆とあらずふ事
ありけりうき世のさかのうとましく
世をのかれしつかによはひを過しなん
と思ひこめしか生身観音御製作の
童男大士こそよにためしまれなる

靈像ことにとしころつかへ奉りてはなれ
まいらせん事のおしくもなとつら／＼思ひ
めくらすにそすゝろに涙のこほれぬ所詮
身にしたかへ奉りてなかきよの引撰をも
たのみ奉らんとひたすらに思ひとりひそ
かに佛工をかたらひ尊像をみまかふは
かりにつかはしくうつさせてこれを御厨
子のうちにうつしかへ御製作の尊像をは
人しれすもり奉り仁平三癸酉の年九月
十五日當国海士郡由良の湊長郷のさと、
いふ人目かれたる谷の奥にと、まりぬさて
此里の東にあたり一字の精舎をいとなみ
岡の堂と名つけてくたんの尊像を安置し
其身もそのかたはらに草の廬むすひ

行ひすましておはしけりちかきわたり
のものとも、なのめならずよるこひ朝
な夕なにまうて侍りけるとそ

【下巻…第二段】

筑前国安の郡と聞えしなんめり孫九郎とて
三十にかたふき四十にたらぬ年ひしたる
もの有けり西国三十三所の靈区を信して
三十あまり三たひおかみめぐらんといへる
誓ことをし一向ら拝みめぐりけり
またなき信者にてそ有けるある時ゆら
のみなと長郷の衛門といへるもの、所にや
とりあるしと対ひ居て夜一よこ、かしこ
の貴き事とも拾ひあつめかたり明し
ける衛門順札にきこえけるは此里の東に
岡の堂といふ精舎あり此本尊はもと粉河
寺の別院御池海岸院の中尊にておはし
ませりかたしけなくも観音神變の御製
作前代未聞の尊像なり不思議のえにし
ありて此所にわたらせたまひはや三百三

十年はかりの春秋をへたりいかなるゆへ
やらん此比寡人か夢に童男大士来らせ
たまひ我は粉河寺に帰りなん今は粉河に
還るへしと打つ、き三夜まで告給ふと
さたかに見はへりぬあやしきよとこまやかに
かたりける巡礼つくく、打聞てあなうれし
や此年ころか、る事のはへりとゆめく
しらて幾度かむなしくすきつらん時し
ありてこよひ聞つる事の有かたさよこ
れも歴劫不思議の御誓を年来あふき
て三十三度を期してまうて奉る其御
利生ならめと覚れはいと、結縁もあら
まほし明なはとくく、拝み奉りたくこそ
なといふほとにあるしき、て世にまれ
なる尊像にて重きか上に重くし奉れ
はおほろけの事にてはひらきまいらせねと
遠つ国のまらう人といひいみしき信
者にておはせはゆるしてそと拝せ申
へしとてまたの日やかて岡の堂にくし

てゆき^(重)□々をひらけは順礼ひれふし
貴み奉りけりさてそれよりも順礼は
すくに粉河寺にまうてにけり

【下巻…第三段】

粉河寺のおく本山のふもとなる河原といへる
山里に北田三郎太夫定清といふものありけり
順礼孫九郎はいつもこゝに一夜をあかして
通りけるかこのたひもまたやすらひにけり
順礼定清にいひけらく世にめつらしき
事こそあんなれきのふ由良の里にて
かゝるやん事なき尊像をこそ拝み奉り
ぬれといとこまやかに語りければ定清
眉をひそめさこそあらめされといま
粉河寺の御池靈験日に新におはしまし
高き賤きあふきまうて奉る事めを
おとろかしぬ中にも国守尾張守^{畠山}代々
わきて信仰あつく物なと多く寄たまひ
ちかきころも燈明料の田地をまいらせ
たりしなりこの折しもかうやうあやし

けなる事なのたまひそかへりて世のわ
らひくさともなりなんとそ覺ゆとにかみ
いひければ順礼けにもとや思ひけんう
ちうなつきて出にけり

【下巻…第四段】

後三とせをすくして文明十八年丙午にあた
れるはしめの春後の三日の夜亥刻はかり
いたうくらきに童男大士の龕宝の中
より自然の火をこり出けりつゆはかり
おもひもかけぬ事なれはとよめきあはて
けるうちに本尊よりはしめ堂舎もやかて
煙りとなりうせぬ時の住持頼舜はいふ
もさらなり大衆つとひあつまり此事を
のみ歎きかなしみてまつ堂をや建まし
本尊をやつくらましとりく沙汰し
あひしか先本尊を造りまいらすへきに
事さたまり其くはたてしぬへしとて
ふしにける其夜^{廿四日} 御池の長老の夢
に童男大士みえさせ給ひて我ひさしく

異方にあそひ利益をほとこし侍りぬと

いへといまは此所にかへるへし我像を作る

へしとの用意はとく／＼とまれよとさや

かにさとし給ひぬとみてさめぬ又大門の

十穀坊に覚音といふ乗門ありむらな

き信者にてそありける同夜の時もたか

へす長老の見給ひし夢にわり符を

合たることく此聖にも告給ひにけり

【下巻…第五段】

北田定清は御池の堂舎回祿のよしを聞し

より三年まへかるとよ筑紫の順礼か語りし

御池の本尊の御事こそいふかしけれ

此折しもまた順礼の来られよかしな詳

かに尋てこそみまほしけれと心の中に

祈りひとりことしてあたりしか佛の

御はからひにやあくる廿五日の未刻はかりに

彼順礼まかりて扉をたゝきぬ定清大に

打ゑみさても思ひしにかなふ不思議

さよと心の底にこゝろ。ふかく感して様々にもて

なしけりさて順礼にかたらく聞もし見もし

給ふらん粉河の御池こそあやしき火いて、

一へんのけふりとなりぬいにし年の

たまひ聞えし由良の本尊の御事こそ

今更きかまほしけれいかに／＼といへは

順礼されはとよさりしとしたしかにおかみ

奉りしかといまはしらすわたらせたまふや

尋てこそまいらせめとてしの、めの

ほから／＼とあくるやをそしとやかてゆら

のさとにまかりしか本尊はもとのことく

にそおはしましける悦ていそきはせ

かへりしか／＼とつくれば定清なのめな

らす歎ふ事二なしされと此事ひろ／＼と

さたし侍りなんもいとわつらはしさはい

へとこのまゝ、すてをきなんも無下にはかな

きわざに覚ゆれば粉河へしらせまいらせん

とてやかて廿八日の寅刻はかり先大門の

覚音か菴にゆきてしか／＼とさゝやけは

覚音は打うなつきいらへもせて定清を

くしすくに御池にはせむかひ長老に
かくと告るよりはやく三人うちなみた
くみ手を打てこれひとへに本尊此たひ
本土に還りおはしまさんする時の正に
至れるならまし殊更三とせまへあらかしめ
衛門かみし夢といひ此般われく二
人か同し夜の同し時に見し同し夢の
御告のいちしるき御事よと感にふして
すゝろに袖をそしほりけるさて大衆に
もかくとかたればよしや伽藍はやけぬ
ともあらためつくりなん霊像のうせ
たまはてわたらせたまふとの御事
こそひとへに此山のさかへて末久しかる
へしとの瑞兆ならめ三たりの見給ひし
ゆめこそあらたなれをのくかしこ
にまかりていそきむかへ奉れよかしと
大衆一同にそ申されける

【下巻…第六段】

定清は順礼にあないさせ長老をはしめ覚

音これかれともなひつれ廿九日のあかつ
きの鐘とともにいさましく粉河をいて
由良をさしてまかりけるさて衛門か館に
案内こはせ尊像を粉河へかへしまいら
すへきよしをいひ入れは主しけし
からすかほあしく代々此所に伝えてやす
くは人におかませたにもしはへらすまして
外に移しまいらせんやふつく望みには
えこそまかせしとあら、かなるこゑして
聞えしかなを由良の寺にこそ殊に秘
蔵して何事も寺よりはからひたまへは
しり侍らすとそ答へけるみなくをの、き
あきれさてはいか、すへきやらんとおもひ
わつらひ居たりしかまつく其本尊を
拝み奉らまほしくこそと衛門をとかく
すかしなくさめやうく岡の堂にもなひ
まかりて拝し奉りけるに御池の尊像に
いさ、かもたかふとみゆる所はなくてた、威
霊に気高くて神仙にむかふかとはかり

身しまりてそ覚へけるをのくいと、
信仰肝にとほり覚へす五體を地になけ
守り居て法施いと念比にしさてあなちち
こひけれは衛門もいなむにことはなくて
由良の寺へ尋申さんといひすて、まかり
けりとかくして時移りはやたそかれに
なりぬかうやうなる一大事の望み申出し
あれたる御堂のもる人もなきに徒に帰
りなん事こそ不覚ならめ今宵はつ
とめてまもりをるかはた衛門かやとに
くしゆかなんなどいへはまたかたへより
押てくし奉ん事佛の御意もはかりか
たし御闇をうか、へといふになりやかて
とりてけれは三たひまで望む所の闇下
りぬをのくよるこひきそひていそき
龕をかき衛門かやとのおくのまに入奉り
尊像の御まへに僧侶かしらをましへ
座をならへて通夜し奉り還御を
ひたいのりにこそいのりけれ

【下巻・第七段】

寺より僧達あまたいとあはた、しく
まいりつとひてまつに断る事もせてなど
かく本尊をはむかへ下しまいらせけるにや
いそき寺へかき入奉らんといきほひ猛に
気あしくこそ聞えけれ定清打むかひ
つゆ臆すともみえず僧達に心をしつめて
はしめ終りを聞しめし候へかしな
われく心のま、にしけるわさならず
しかくとの仏の御告をうけし上なをも
御闇を取てかくはくし奉りしなりと
智弁滞らす泉をなかしはいひのへ
けりさて詮はた、凡夫のこ、ろにまかせ
とかくさたし申さん事おそりあるに
似たり僧達も角をおり闇をうか、ひ見
たまひ佛意のま、にこそはからひたまふ
へけれといへはさすかの僧衆も此理りに
さしていはんやうなくいまは闇を下ふへし
とてぬかつき手を□^(に)へてうかかはれしかと

佛意いかてたかふへきなればたゝいく

たひも粉河に帰りおはしまさんとの

御闡にてそありける此上は異議にや及

ふとくくとはかりいひひそまりてまかり

けり衛門も見しゆめのふしきなと思ひ

合せかつ悦ひ且泣ておしくはまと思

へといつこも同じ衆生済度の御ため

なればこそえにしやまた粉河に起り

けるならめ其夕への御迎へこそな

をもたのみ奉るかならすすてさせ給ふ

なとかきくときてあめしつくとなき

けり

【下巻…第八段】

さてをのく二月朔日のあさまたきにいと

まを衛門にこひ本尊をかき奉りて帰り

来る玉銚のみちすから定清人々にきこ

ゆるは此明方になん一の霊夢をこそ見侍

りぬれ夜部いもねす本尊の御前に念誦

し侍りけるうちつくくとおもひめくらし

けるはかくはかり辛ふして還御をこ

ひねかひ奉るになとあはれとみそなはし

夢の告をたにもなしたまはさるにやと

ひそかにうらみに恨みまいらせいのり程へ

て卯のはしめにもやあらんみやひやかに

たうときよそほひしたる童子の来らせ

たまひわかまことのすかたおかませ申へし

東方にむかへよといといみしき御声にて

聞ゆ身に徹りありかたおほへやかて

彼方に面をむけ侍りしかはた、春の日

の山の端より立上り給ふかとまかふまで

光明かくやくとひらめきわたりこれ真の

かたちなり能見つるやと告させたまふと

みてさめけりとかたりければ人々

いと、感信いやましさかしき山路のいた

はりをもわすれてそたゝすゝみにすゝみ

ける

【下巻…第九段】

其日やかて粉河にかきつけ御池にすへ

奉りにけり三百三十三年の数をへて

ことし本土に帰らせ給ふこそふしきと

いふもさらなれさてよろつの人々しかくくと

いひちらしけるにそよるひるをわかすむ

れまうて侍りけり薪大にしては火熾り

なりといふなる此後威光いよくあら

たにおはしましけるほどに衆徒をは

しめて税納をそへ遠近の僧侶ちからを

あはせやかて明る長享元年丁未の冬

十一月初の八日になん御堂をも美しく

つくりなしました珠玉をましへて莊嚴

をきはむ坊舎さかゆき法燈なかく耀^けり

さて彼順礼はかきけしうせてつゐに

行方をしるものなしとそ定て観世音の

化し給へるならんと人々沙汰しあへり

けり霊夢をかふりむかへ奉られし

長老も覚音もえにしあさからしとそ

覚ゆさらにもた定清や衛門か未来の引

撰さためてうたかひあらし末の代とは

いへと応用の月いかてかくもり侍らん

なればた、心の濁りをすましふかく信

すへしよろつの願をみてなん事鏡に

むかひて影あるかことくならんかしあ、

盛衰は世の理りにまかせ廢れるを歎き

興れるをよろこふもふかき法のえにし

ならずや霊像永くと、まり聖跡と

こしなへにして池に千年の水た、へ

鳴は常樂の枝しけし六十余り六

の国々より三十三所にまうてくるたれか

此霊場をふまさらん低頭拳手の法

財を拾はざるはあらしかたしけなくも

凡愚の身なからふたらくの浄土に歩み

ちかく生身の観音にまうて奉る事

あにおほろけのえにしならんやこひ

ねかはくは見聞隨喜の輩とおなじく

宝手の引撰にあつかり親しく大悲観

音につかへてともに普門にあそひ

長き夜の闇をてらさんものならし

〔校異〕

〔上巻〕

- | | | | |
|-------|------------------|------|-----------------|
| 一―三 | 弘誓の海の↓弘誓の | 三一三三 | 神月↓神用 |
| 一―五 | 因縁深く↓因縁深くて | 三一三六 | おひて↓おほひて |
| 一―六 | ねんころなるは↓ねんころに | 三一四〇 | 侍りしとか↓侍りしとかや |
| 二―七 | たえすさかへ↓た、すきて | 三一四二 | 男童↓童男 |
| 二―一八 | 海に↓海下に | 三一四三 | 法衣↓法衆 |
| 二―二〇 | 。草 ↓くさむら | 三一四五 | 錫↓錫杖 |
| 二―二二 | えならず↓えならぬ | 三一四七 | 是ぞ↓是に |
| 二―二三 | ほのかよひ↓ねのかよひ | 三一四九 | 童女↓ナシ |
| 二―四八 | 遮那三密の鈴の↓遮那三密の | 三一五〇 | とかや↓と |
| 二―四九 | 響て↓闇て | 三一五四 | とぞ↓そと |
| 二―五三 | 称る声々は↓唱るこゑくは | 三一七〇 | 正しく↓正して |
| 三一六 | 尋るに↓尋畢 | 三一七一 | 給ふなめり↓給ふなり |
| 三一七 | 本高く↓本尊く | 四―二 | いへと↓いへり |
| 三一八 | たまふといへと↓給ふといへとも | 四―九 | 奏し↓奏して |
| 三一―一 | 海に引網↓海に引綱 | 四―一〇 | 異香↓異光 |
| 三一―二〇 | 恢廓↓恢郭 | 四―二五 | 身真のすかたなり↓真身の姿なり |
| 三一―三二 | 廻し↓巡し | 四―二九 | まよへる人の↓迷へる人は |
| 三一―三三 | 「先無謀」直前の字間、天明本ナシ | 四―三〇 | 利生の縁↓利生 |
| | | 四―三一 | 悉檀隨機↓悉檀墮機 |
| | | 四―三五 | ちかくよりて↓ちかよりて |

- 四―三六 奉ん↓奉らん
 四―三六 おそり↓おそれ
 四―三八 締ひ↓むすひて
 四―四四 おかみ奉らさる↓拝み奉る
 四―四五 恨なりなと↓恨なりと
 四―五〇 安し↓安置し
 四―五一 妙體↓妙躰
 四―五三 おほくの巨益をかふる↓おふくの利益をかふむる
 四―五四 なりとそ↓ならしとそ
 四―五五 源なりとかや↓源なりとや
 四―六三 彫残させ↓彫残され
 五―七 利生↓利益
 五―一〇 拝したまひ↓拝しまし
 五―一一 尊容↓尊言
 五―一二 安し↓安置し
 六―四 たまひ↓給ひて
 六―五 うせ給ひぬ↓うせ給ひける
 六―五 河には↓河は
 六―一一 あらはせり↓踵し給へり
 七―一 在中将の北方↓在中将北方

- 七―二 くた物を↓くたもの
 七―五 業平と北方も↓業平も北方も
 七―八 しるく↓しるゝ
 八―二 三十一文字の「の」は「を」に重書訂正
 八―一 五隻↓五隻
 八―三 くはしく↓示しく
 八―四 いひもらしぬ↓言ひもらしぬる
 九―六 いたう↓いこふ
 九―九 わきて↓わけて
 九―一二 補陀↓補陀落
 一〇―二 つらねて↓つらね
 一〇―三 ならせ給ひて↓ならせ給ひ
 一〇―八 碑文にも↓碑文をも
 一〇―九 大悲↓大慈大悲
 一一―六 おはせし↓おはしませし
 一一―六 異文↓靈文
 一一―九 異なる↓靈なれる
 【下巻】
 一一―〇 めくらすにそすゝろに↓めくらすにそゝろに

- 一―一三 見まかふはかりにつかはしく↓見まがふはかりに遣して
- 二―一 安の郡↓安野郡
- 二―二 年ひ↓齡
- 二―七 長郷↓長者
- 二―三〇 重くし↓重し
- 二―三一 ひらきまいらせね↓ひらき參らせむ
- 二―三三 おはせは↓おはしければ
- 二―三五 ^(重)□々 「々」右傍に墨付抹消痕有るも判読不能。
- 二―三五 ^(重)□々↓^(生)□々
- 二―三七 粉河寺に↓粉河寺へ
- 三―一 ふもとなる↓麓
- 三―二 北田三郎太夫定清↓三郎太夫定清
- 三―六 あんなれ↓あんなき
- 三―七 拜み奉り「り」は「れ」を重書訂正
- 三―一二 国守↓国主
- 四―二 後の三日の夜亥刻↓後三日の亥の刻
- 四―六 うちに↓うち
- 四―八 此事をのみ↓此事を
- 四―九 まつ↓先
- 四―一〇 つくらまし↓作らまし
- 四―二〇 たかへす↓たかはす
- 四―二二 ことく↓か如く
- 四―二二 告給ひにけり↓告給ひけり
- 五―七 未刻↓未の刻
- 五―一 さて↓ナシ
- 五―一三 のたまひ聞えし↓の給ひし
- 五―二〇 ことくにぞ↓如くにて
- 五―二二 しかく↓としかく
- 五―二三 二なし↓二なし。絵巻の振仮名は同筆
- 五―三一 告るより「よ」は「に」に重書訂正
- 五―三三 本土に還り↓此土に帰り
- 五―三五 此般↓此度
- 五―三五 二人か↓ナシ
- 五―三六 同し夢の↓おなし夢は
- 五―三七 御告のいちしるき「のい」は「こそ」に重書訂正
- 五―四二 此山のさかへて↓ナシ
- 五―四四 ゆめこそあらたなれ↓ゆめたにあらたなん
- 五―四五 奉れよかし↓奉られよ。絵巻の傍記は同筆。
- 五―四六 一同にぞ↓一同に

六一九 外に↓外へ

六一一〇 あら、かなるこゑして↓あら、かに

六一一三 をの、き「、き」は「く」に重書訂正

六一二三 念比にし↓念比にして

六一三一 ゆかなんなど↓ゆかんなと

六一三五 いそき↓ナシ

六一三八 し奉り↓奉り

六一三九 ひたいのり↓いたいのり

七一五 気あしく↓けはしく

七一八 わさならず「なら」に重書訂正あるも判読不能

七一八 手を□へて □、重書訂正あるも判読不能。絵巻・

天明本ともに「丹」を字母とする「に」と読めるか。難読。

七一二六 起りける↓起しける

八一二 本尊を↓本尊

八一二 帰り来る↓帰りける

八一―一 はしめにもやあらん↓はしめめに、もあらん

八一―三 すかたおかませ↓すかたを拜ませ

八一―七 上り↓登り

八一―七 まかふ 重書訂正あるも判読不能

八一―八 かくやく↓かくく

八一―二〇 さめけり↓さめける

九一―一 かきつけ↓かきつき

九一―二 奉りにけり↓奉りけり

九一―四 さらなれ↓さらなり

九一―六 まうて侍りけり↓詣てける

九一―七 いふなる↓いふなき

九一―〇 明る↓ナシ

九一―一 になん↓ならん

九一―三 耀けり↓耀ける 絵巻の傍記は同筆

九一―五 観世音↓観音

九一―二〇 末の代↓末代

九一―三三 ふたらく↓補陀羅落

奥書 ナシ↓天明七丁未 歳秋八月彼岸日